

平成27（2015）年度
熊本大学大学院法曹養成研究科

第1期募集（小論文試験問題）

試験時間 120分

頁・・・ 1～3

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、問題用紙を開いてはいけません。
2. 試験開始後ただちに、問題用紙（この表紙を含めて4枚）、解答用紙（5枚）、下書き用紙（5枚）が、揃っていることを確認してください。
3. 解答用紙のすべて（5枚）に受験番号を記入してください。なお、氏名は記入しないでください。
4. 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入してください。解答用紙のホッチキスは、外さないでください。
5. 問題の内容に関する質問には応じません。
6. 配付された解答用紙は、持ち帰ってはいけません。
7. 試験終了後、問題用紙および下書き用紙は持ち帰ってください。

【課題文】を読み、以下の設問に答えなさい。なお、いずれの問題も法的知識を問うものではありません。

問題1 著者は、「たとえばこんなふうになおしたら」として課題文中の例文を書き直している。課題文中の著者の考え方に即して、例文を200字程度の文に書き直しなさい。

問題2 著者は例文をどのような文と考えているのかについて、その理由と共に400字以上600字以内で述べなさい。

問題3 著者が例文を改善するのに最も重要視している点を踏まえ、課題文にふさわしい見出しを10字以内で述べなさい。

問題4 著者が考える例文の問題点及びその改善方策について、あなた自身のこれまでの文章作成経験なども踏まえて600字以上800字以内で論評しなさい。

【課題文】

「(見出し省略)」

以下の例文を検討する。

おばちゃんは、天気がいいときには、朝から畑をほったり、こやしをやったり、朝早く起きて、ごはんとおかずをたいたり、寮の人のふとんや、よごれていたらずしてやって、洗ってやったり、また、ほかに男子や女子の洋服などの洗濯したものや、ほころびたり、やぶれたりしていたら、おばちゃんの所に持って行くと、ひまのときに縫ってやったりして下さいますから、私はいつもありがたいと思います。

こんなふうに、文脈の通らない文がつぎつぎに綴られている文章は、さぞ読みにくいことだろう。原文には、漢字も少なく、句読点もない。この文がわかりにくい主な理由は、テニヲハの使い方がメチャメチャな所がある、時の概念の表現がはっきりしない所があるなどであろうが、もっとも根本的には、ものごとの分析的表現が出来ていないために、文脈が理解しにくいということがあろう。この文を引用した長崎県の近藤さんという人は、次のような感想を述べている。

この類いの人たちの文は、ともかくも羅列的であって、つなぎことばを使うことが、なかなかできない。それでいて、同じことをくりかえして書く。それで言おうとすることは、きわめて簡単なのに、まわりくどく書く。無駄だとおもうところをけずったり、つなぎことばを、さしいれてみたりすると、じつは、ほんの少しの内容しかない。

近藤さんは、こういう文の「じれったさ、やりきれなさ」を嘆きながら、なお教育の可能性を説き、身近な周囲の人たちの深い愛情と社会の正当な理解とを求めている。まことに同感であって、私も表現への彼らの意欲と努力に声援を惜しむものではない。ここでも、その懸命な態度に対して、とやかく言うつもりはない。ただここでは、文を分析的に表現することはどういうことなのかを考えてみたいと思う。

この例文の切り方つなぎ方を考えて手を入れてみよう。

(中略)

最小限になおすとして、たとえばこんなふうになおしたら、よほどよくわかると思う。訂補の主眼は、文を切ることと最小限の接続詞を使うことの二点である。ほかに、テニヲハをなおし、二か所9字ずつを削除した。

原文には、ことがらの並列が多い。それらを全体としてまとめて、最後に「それらの理由によって、私は、おばちゃんに対して、いつもありがたいと思っている」というのだから、全体としては単純な文章構造である。しかし、並列されることがらが単独の述語的表現の並列ではなく、

天気がいいときには、朝から — 畑をほったり、こやしをやったり、

朝早く起きて — ごはんとおかずをたいたり、

寮の人のふとんや、よごれていたら — はずしてやって洗ってやったり、

というように、修飾語のついた述語的表現の並列である。そのために一層長くなって、文脈がたどりにくくなっている。まして、右の最後の例のように、誤用まで含んでいけば、文脈がわからなくなるのは当然である。

そのうえ原文では、述語部分に対する動作の主体が、かなりめまぐるしく変化する所があつて、ダレがナニをするのか、文脈を追って自然にわかるというわけにはいかない。いちいち主語を言わなくてもいいという、日本語の便利なところが、論理的欠陥として、あらわになっている。ダレがナニをするのかを、一つずつ分析的に明確に表現することは、現代の一般の文章では必要なことであろう。

もちろん、文を分析的に表現するということは、つねにそこで言い切って句点を打たなければならぬということではない。いわゆる連用中止法や、接続助詞による接続など、読点が打たれる表現でもよい。ただ適切な長さが、記憶の負担を軽くするために、要求されるということであり、論理的に明晰な文章が求められることの多い現代では、文はあまり長くないことが望ましいというのである。

文の長さは、一般にどの程度のものがよいのか。およそのめやすでは、新聞雑誌などの論説的な部分でも平均17文節か18文節前後であり、小説の地の文でも、平均14文節前後であると言われる。もちろん、わかりやすさの問題は、単に、文の長い短いということだけでは決められない。ほかに、単語の問題や文の構造の問題もある。しかし、いずれにしてもこの原文は長すぎて、45文節にもおよぶ。訂補した文章では、これを5文に切り、平均8文節あまりにしてある。また、接続詞は原文に一つだけあるが、訂補した文で

は、三つ使つてある。接続詞の使用は、かなり慎重にしないとイケないが、簡単なことを、明晰に綴るためには、あまり遠慮することはないであろうと思うからである。

要するに、文の切りつなぎの面から見れば、悪文の代表の一つは長すぎる文であり、論理的な明晰さを、読み手に感じさせない文章である。

(出典：岩淵悦太郎編著「第三版 悪文」日本評論社〔1979年〕71頁から75頁、原文縦書き・一部改変)